

○孝恭王(一五) ○神德王(一五) ○景明王(七) ○景哀王(四) ○敬順王(八)	(三國) 泰封王國 後百濟國 高麗の勃興	(憲康王庶子)といふ者あり、王位を望みて得ず、即ち王室の衰運に乗じて北原(江原道原州)に據り、高麗再造を以て名となす、諸州來屬する者多し、遂に自ら王と稱して百官を置き、國を泰封と號す、此時尙州の人甄萱は完山(全羅道全州)に據て反し、後百濟と稱して悉く百濟の故地を併す、半島又三國の鼎立となり、新羅愈衰ふ。 高麗の勃興。 新羅の末造天下三分の時に當り、遂に泰封に代り、新羅を降し、後百濟を滅して一統の業をなせし者は高麗なり、今高麗の事を叙するに先ち此に渤海の興亡をいはん。
●渤海 大氏	渤海の興起	第六 渤海王國 渤海は元靺鞨の部落にして高

十四世 一一五年 ○高王(五) ○武王(一八) ○文王(五七) ○成王(一) 康王(一四) ○定王(五) ○僖王(五) (簡王(一)) ○宣王(一一) ○恭震(二八) ○成晃(一二)	地勢 震國 大氏 渤海 (唐朝) (日本) 渤海の盛衰 中興 五京 盛世	麗の北に位し、南は長白山を限り、東は日本海に臨み、西は渤海に沿ふ處の地なり、三國高麗の亡ぶるに及びて餘衆稍之に歸し、國を震と號す、祚榮の時大に境土を擴め大氏と稱す、唐の睿宗册立して渤海郡王となす、(日本元明天皇の朝に當り)其子武王は境土を争ひて唐と戦ひ、日本聖武天皇の時禮を通じて其力を借らんとを謀る、後又唐と和し、是より日本及び唐室に貢事するを久しきに亘れり。 渤海の盛衰。 中興の祖宣王の時に至り、境域益々廣く、南は新羅に接し、東は海を窮め、西は契丹に至り、五京十五府六十二州あり、制度整ひ、文學起り、五十余年の間海東の盛國と稱せらる、哀
---	---	---

○景王(三二) ○哀王(二六)	(契丹) 衰亡	王の時に至り契丹(遼)の太祖阿保機の爲に亡され、世子及び大臣等皆高麗に降りりといふ、時に高麗の太祖十年にして、中國は五代後唐、日本は醍醐天皇の朝に當れり)
●高麗 王氏 三十四代 四五六年	高麗の建國	高麗の建國。新羅の末造三國分立の時に當り、泰封國の侍中に王建といふ者威望あり、衆の爲に推され自立して王となり國を高麗と號す、泰封王弓裔走りて殺され泰封亡ぶ、明年都を開城に定め平壤を西京となす、是より國政大に振ふ、新羅は景哀王の時、後百濟王急に兵を起して國都を陥れ王を殺して王弟を推立し、之を敬順王となす、太祖怒て後百濟を征す、其後新羅は國
○太祖 在位二六	新羅の末路	

第七 高麗王國

○惠宗 在位二年	後百濟滅亡	衰へ兵少きを以て自ら來て服屬を請ひ、新羅此に亡ぶ、後百濟王甄萱は屢々高麗と戦ひしが、其後王子神劍其父を幽し弟を殺して自立す、明年太祖親征して神劍を降し、後百濟此に亡ぶ、其自立以來四十五年なり、是に於て半島全く王氏の統治に歸す、(時に五代後晉、日本朱雀天皇の朝なり)宋室中原を統一するに及び、高麗又宋に通じ宋の太祖より高麗王の封冊を受け、其正朔を奉じたり。
○光宗 在位二六	宋朝の封冊	
○景宗 在位六年	内亂と外患	内亂と外寇。太祖より五傳して成宗に至り、大に政治を更め風俗を正し紀綱益張る、會々遼來て西鄙を侵す、内史侍郎徐熙使して遼將と境界の事を論じ、高麗の再造なるを説きて其師
○成宗 在位一六	成宗の治蹟 遼國の來侵	

○穆宗 在位二三	宋朝の衰運	を卻けしむ。其後援を宋に請ふ、宋從はず、依て宋と絶ちて遼に屬す。遼の聖宗、宋の眞宗、日本一條天皇の時なり。穆宗の時大臣唐兆は王を弑して顯宗を立つ。遼主兵を以て其罪を問ひ、康兆を斬り國都に迫る。顯宗出奔す。遼は開京を焼て還る。顯宗因て京に還り和を求む。遼主は北境の六州を納れしむ。王從はず、援を宋に求めて其正朔を奉ず。後又遼兵來攻め勢敵すべからず、依て又遼に貢事して其正朔を奉ず。是より互に宋遼の正朔を用ゐたり。文宗の時心を政治に用ゐ國富み世平なり。睿宗の時女眞國を建て、金と號し勢甚盛にして數々邊境を犯す。宋の金と約して遼を滅すに及び、高麗は又遼に仕ふるの禮を以て
○顯宗 在位三二	大臣の專權	
○穆宗 在位三三	遼宋の關係	
○睿宗 在位三六	文宗の治蹟	
○文宗 在位三六	金國の來使	
○順宗 在位一年		

○宗宣 在位一一	外戚の專恣	金に事へたり。
○獻宗 在位一年	李資謙	仁宗の時外戚李資謙政柄を握り王を己の邸に遷して專權を極め、遂に毒を王に進めんと計る。柘俊景等急かに王を奉じて出で資謙を捕へて之を流す。後俊景又功を恃みて不法なり、遂に貶せらる。次で又妖僧の亂あり。
○肅宗 在位一〇	妖僧の謀反	此頃陰陽禍福の説大に行はる。僧妙清之を説きて寵用せられ、頻に土木を起す。妙清異圖を蓄へ其徒と西京に據て反し、天爲國と稱す。平章事金富軾討て之を誅し事平ぐ。金富軾學識あり古今に通ず。致仕の後三國史記五十卷を撰す。新羅、高麗、百濟の興廢制度を明にしたる者なり。
○睿宗 在位一七	妙清	
○仁宗 在位二四	三國史記	
	金富軾	
	宦官の專橫	仁宗薨に太子を代へんとす。東宮侍讀鄭襲明能

○毅宗 在位二四	武臣の跋扈	<p>く回護して位に即くとを得たり、之を毅宗となす、然るに宦官小人之を陥れんと計る、襲明遂に自殺す、是より宦官事を専にせり。</p> <p>武臣の跋扈。 毅宗は文事を主とし武臣を斥く、將軍鄭仲夫等憤て亂をなし王を廢して其弟明宗を立て大に文官を殺す、後兵馬使金甫兵を擧げて毅宗を復さんと謀り事成らずして敗死す、之を庚癸の亂といふ、是より武臣互に權柄を弄し、將軍慶大升は鄭仲夫父子を殺せり、而して崔氏又起る、將軍崔忠獻は甚勢威を振ひ、國政を執ると二十餘年、其間二王を廢し四王を立て、暴戾を恣にして奢侈度なし子孫相繼て政柄を執り四世百餘年にして亡びたり。</p>
○明宗 在位二七	鄭仲夫	
○神宗 在位七年	金甫	
○熙宗 在位七年	慶大升	
○康宗 在位二年	崔忠獻	
○高宗 在位四六	崔沆 崔誼	

○元宗 在位一五	元朝の封冊	<p>元朝の壓抑。 高宗の時契丹來侵し勢猖獗なり、依て蒙古の援を得て之を退く、其後蒙古又來侵す、崔瑠王を奉じて江華島に遷り君臣皆逸樂を事とす、瑠の子沆を経て孫頊の時に至り、金仁俊遂に崔氏を滅す、高宗又世子を質とし和を蒙古に求む、高宗薨するに及び元世祖は其質子を封じて高麗國王となし、國に還らしむ、之を元宗となす、時に林衍は金仁俊を殺し廢立を行ふ、元宗逃れて元に入り之を訴ふ、世祖之を助けて復祚せしめ開城に居る、高麗是より歷世常に元の壓抑する處となれり。</p> <p>元朝の東征。 先是倭寇稍高麗の沿海を侵略す、元世祖既に中原を一に大に四方の志あり、</p>
	元朝の壓制 契丹の來襲 蒙古の侵略	
	元朝の東寇 日本	

○忠烈王 在位三四	日本の果斷	<p>日本の情を聞知し高麗に介し使を遣はして其聘を促すと三度日本答へずして元使を斬る世祖怒り高麗の兵と共に之を討つ功なくして歸る尋て又大兵を發して日本を征し大に敗績す日本之を文永弘安の二役といふ高麗又是より日本と絶つ此役高麗は元の爲に兵船糧食を備へ國益貧弱となれり。</p> <p>元朝の壓抑。 忠烈王は初め元に質となり其皇女を妃とす故に即位以來制度服飾皆元朝に倣ひ元の壓抑愈甚し王位を其子忠宣王に傳ふ忠宣王元を悦ばず元即ち王を廢して復忠烈王を立て征東行省<small>(日本を征する計策を司る)</small>を高麗に置き王をして省務を分掌せしむ蓋し空名なり後忠宣</p>
○忠宣王 在位五年	元兵の東寇	
○忠肅王 在位一七	高麗の貧弱	
○忠惠王 在位一年	元朝の壓制 制度の變革	
○忠穆王 在位四年	征東行省	

在位三年	君立の更立	<p>王復祚し忠肅忠敬の諸王或は位を去り或は位に復し三十年の間王位の更立一に元の命に依り壓抑未だ此時より甚しきはあらず恭愍王の時元室漸く衰ふ王即ち征東行省を廢し兵を遣りて北境を守らしめ元の年號を停め官制を復したり然れども外難僅に止みて又内憂あり。</p> <p>紅賊の來侵。 此時支那河南諸州に紅頭軍あり又紅賊といふ江を渡て來侵し遂に京城を陷る安祐鄭世雲奮戦して之を退く金鏞其功を忌みて二人を殺し廢立を計る事露はれて誅せらる此間中國は元亡びて明興れり。</p> <p>辛氏の凶虐。 當時武臣跋扈して互に權勢を争ふ王は僧遍照を寵用し姓名を辛旽と賜ひ國</p>
○恭愍王 在位三三	元室の衰運	
	紅賊の來襲	
	京城の危急	
	權臣の軋轢	

●王禩

(辛氏)

在位一四

(辛旽)

宦者の専恣

他姓の嗣立

倭寇の來侵

高麗の滅亡

明との關係

國界の爭議

政を執らしむ、旽威福を恣にして忠良を害し、遂に弑逆を謀り、事露はれて誅せらる。其後宦者崔萬生權を恣にして王を弑す。李仁任即ち辛禩を立つ、王子と稱すれど實は辛旽の子なり。

倭寇の來侵。先是日本は南北兩朝の世となり、西陲の民多く海賊となりて高麗沿海の州縣を侵畧し、王禩の時に至て愈甚しく、遂には支那の沿岸に及ぼしたり。高麗滅亡の原因は倭寇實に其一に居るといふ。

高麗の滅亡。此時李仁任威福を弄して明に貢事するを欲せず、崔瑩、李成桂攻めて之を弑し、和を明に求む。明は迫て鎮嶺以北の地を納れしむ。王從はず、崔瑩の説を用ゐ、李成桂をして共に

○王昌

○恭讓王

交戦の可否

李氏の廢立

明鮮の興起

遼東を攻めしむ。成桂其四不可を論ずれども聽かず。諸軍己に鴨綠江を渡る。成桂師を還へし、崔瑩を殺し、王禩を廢して恭讓王を立て、自ら中外の軍事を統ぶ。終に又王を廢して自立し、封冊を明に請ふ。之を現代朝鮮王國の祖となす。

近世史

第八 朝鮮王國

●朝鮮	朝鮮の建國	朝鮮の太祖李成桂は高麗に代
李氏	明朝の封冊	て半島を統一し、都を漢陽(京城)に定め、明室に請
自太祖	日本の交通	ひて國號及び封爵を求め、明太祖仍て特に舊號
至今王	(足利義滿)	を取りて朝鮮國王に封ず、是より世々明の正朔
二十七日	文教の興隆	を奉ず、明の洪武十五年にして日本の元中九年
五百四年		なり、此時日本は足利義滿南北兩朝の和を構じ
太祖(李成桂)		て國內大に治まり、僭竊の害稍止む、太祖依て使
定宗恭靖王		を遣はし、修好を求め、使者再度に及び日本即ち
		舊好を復し、彼我又交通す。
		文教の興隆。太宗の時、明室都を北京に遷し

太宗恭定王	儒學	其地朝鮮に近し、二國益親密となり、儒學又盛に
世宗莊憲王	諺文	朝鮮に流傳し、文教大に起る、世宗の時、申高靈等
文宗恭順王	日本の交通	命を奉じて國字を製し、國音を寫す、是れ諺文の
端宗恭懿王	(足利義持)	創作にして、韓土に自國の文字ある始なり、以前
世祖憲莊王	(足利義政)	は皆漢字を用ゐたるなり。
睿宗康靖王	朝鮮の典籍	日本との交通。此時日本、足利義持大藏經を
成宗康清王	三國史記	求め、世宗需に應じて之を送る、其後日本内外多
	高麗史	事なるを以て、使聘を辭す、唯商估相往來するの
		み、後二十年、將軍義政又舊好を修め、佛經器玩を
		求めたり。
		朝鮮の典籍。此朝、鄭麟趾は高麗史百卅九卷
		を撰し、次で成宗の時、徐居正東國通鑑五十七卷
		を作る、金富軾の三國史記と共に朝鮮半島の興

燕山君	東國通鑑	廢を寫したる史籍なり。
中宗恭僖王	中宗の前後	中宗の前後。其後數傳して燕山君に至る、淫虐無道にして志士多く其禍にかゝる、遂に廢せられ王弟立つ、之を中宗となす、中宗は前代の積弊を改革し政綱大に張る、實に中興の名君なり、中宗の三子相次で宣祖に至る、明の神宗と時を同ふす、時に建國以來昇平已に二百年、上下安逸にして警戒する所なく、外戚事を用ゐて人心離反し、東南の民は苛政を日本に避くる者あるに至れり、既にして日本來り侵す。
仁宗榮靖王	燕山の虐政	
明宗恭憲王	中宗の盛治	
宣祖昭敬王	上下の逸樂	
	外戚の苛政	
	日本の來攻	日本の來寇。日本豊臣秀吉既に宇内を平げて海外の志あり、宗義智をして朝鮮の來朝を促がす、宣祖答へず、日本又明を征する爲に道を假
	(豊臣秀吉)	

宣祖昭敬王	壬辰の變	らんを求む、又可かず、其後三年(萬曆二十年)日本の大軍釜山に至り、兩道來り侵す、朝鮮風靡し八道殆没す、王義州に走り王子捕へらる、之を壬辰の變といふ、明年明の援兵到る而して祖承訓は平壤に敗れ、李如松は碧蹄館に於て敗績す、明乃ち沈維敬を日本に遣はし和を約す、然れども書辭禮なし、日本再び來侵し八道又瓦解す、此間僧惟政あり、(松雲大師といふ)大に義を唱へ國に盡くす、松雲大師奮忠舒難錄あり、世に行はる、其後交戰歲餘、秀吉没し軍終に止む、之を甲午の變といふ、此間七年なり。
	甲午の變	
	條交の條約	日本との和約。日本徳川家康幕府を開くに及び、又宗義智をして舊怨を解きて修好を求む
	(徳川家康)	

光海君

丙午の修好

己酉の條約

文書の辨裁

仁祖憲文王

清國の來寇

使者相往來し、宣祖の四十年(慶長十一年)紀元二二六六年に至りて和議全く成る之を丙午の修好といふ。次て光海君の二年(慶長十四年)貿易條例等を定め、朝鮮よりは天皇即位と將軍宣下の兩式を賀する聘使を遣る事と定む之を己酉の條約といふ。先是足利氏の朝鮮に通ずるや、其曾て明の封爵を受けしを以て日本國王と署す。徳川氏に至り、其初唯日本國源秀忠と記す。依て之を問ふ、爾後日本大君と定む。是より往來絶へず。

清國の來寇。光海君無道にして廢せられ、憲文王立つ。此時滿州は帝と稱して明と戦ひ、又遼東の地を併す。朝鮮尙海路明に通じ、又將を遣て之を救く。其兵皆清に降る。朝鮮終に清と和す。次

丁卯の變

丙子の變

清の封冊

孝宗宣文王

五代の清世

顯宗

日本の修好

て盟を破る。清の兵來攻め平壤を陷る。王江華島に逃れ、終に又和を求め清に朝す。之を丁卯の變といふ。時に明未だ滅びず。王又之に通ず。清太宗又來攻め江華島を降し、王を南漢山に圍む。王出降る。清之を宥して更に朝鮮國王に封ず。之を丙子の變といふ。清太宗崇徳二年(日本寛永十四年)後七年にして明朝殆ど亡ぶ。朝鮮は是より清使を迎恩門に迎へ、又毎年慶吊の聘使を送る。之を冬至使といふ。臣禮を取ると此の如く國の大事は其命を仰ぎたり。

五代の清世。其後父子相承け、五代百三十年の間、隣邦清平なるを以て朝鮮又無事なり。且清及び日本の外は諸國との交通を禁ず。肅宗の時

(徳川家宣)

日本徳川家宣聘禮を改めて日本國王と署す、新井白石の建議に出で是より幕府は此例を襲用するに至れり。

世道の由來

英宗の頃より嬖臣を寵用し威

景宗

大臣

權漸く下に移るに至る、正宗又洪國榮を寵遇し

英宗

外戚

て政務を執奏せしむ、是より朝廷にありて大政

(王愷)

簾中

を輔弼し樞機を掌るとを世道といふ、後幼主位

純祖成孝王

王權の衰微

を繼ぐに及び、王后政を簾中に垂れ、世道は外戚

翼宗孝明王

今代の形勢

に歸す、而して國王嗣屢々絶へて宗室の王子迎

憲宗哲孝王

内憂

へ立てられ、王權愈々衰ふ。

哲宗英孝王

外患

今代の形勢。哲宗英孝王薨じて嗣なし、哲宗

今王

今王

の妃金氏、興宣君の次子熙を迎へ立つ、之を今王

(第二七代)

外患

となす、年十三、大院君李島、興宣君政を執る、時に

(廟號王名)

再録

院君と外戚

清同治二年、日本文久三年、紀元二五二四年なり、此後内憂外患交々起り、國歩數々危し。

○太祖成桂

在位六年

外交禁遏

院君と外戚。先是道光十三年、日本天保四年、佛國傳教師朝鮮に來り、其後天主教漸く行はる、

○定宗芳果

在位二年

外交排斥

初朝鮮は支那及び日本の外總て外交を禁ず、大院君特に西洋人を憎み、天主教を斥け、遂に佛國

○太宗芳遠

在位一三

佛米來寇

宣教師數人を殺し、信徒數萬を殺す、日本元治元年、此に於て佛國軍艦來て江華島を砲撃す、大院

○世宗禔

在位三七

王宮再造

君兵を遣はして之を退く、米國軍艦の來泊するや、又撃て之を退く、大院君外には佛米兩國の來

○文宗瑛

在位二年

閔氏專權

襲を退け、内には王宮再造の工事を終りて景福宮を竣工し、勢大に振ふ、既にして王長じ王妃閔氏才幹あり、政治に與る、大院君遂に隱退し、是よ

○高宗弘暉 在位三年	朝鮮の開國	り世道は閔氏の一門に歸したり <small>(日本明 治七年)</small> 朝鮮の開國。先是日本は將軍家持の時内外 多端なるを以て修好の事を止む、王政復古する に及び、日本國使宗重正來て舊好を修めんとを 求む、書中に日本皇帝又詔敕の辭あり、前例に違 ふを以て之を卻く、使者數反未だ決せず、光緒元 年(日本明治八年)日本軍艦雲揚、江華灣に入る、或 兵之を砲撃す、日本軍艦應戰して江華島を陥る、 次で黒田清隆來て之を詰り、遂に修好條約十二 條を結ぶ、而して此時朝鮮は自主にして、日本と 同等なることを認めたり、米佛諸國皆日本に介し て通商を朝鮮に求む、朝鮮聽かず、即ち清國に因 て之を求め、皆條約を結びたり、故に諸國は朝鮮
○世祖孫 在位一三	日本の維新	
○睿宗 在位二年	日本の聘使	
○成宗 在位二四	江華島事件	
○燕山懷 在位一三	對等の條約	
○中宗 在位三八	海外の修好	

○明宗 在位二二	二黨の亂	を以て清國の屬國となす、其朝鮮の獨立を認め しは獨り日本あるのみ、
○宣祖 在位四一	事大黨	事大と獨立。是より後國內二黨に分れ、大國 (清)に事へんとする者を事大黨といひ、大院君密 に其主たり、又支那の羈絆を離れんと欲する者 を獨立黨といひ、互に相争ふ、光緒八年(明治十五 年)京城の衛兵亂を作し、日本公使館を襲ふ、公使 花房義質纒に難を逃れ、國に歸る、日本即ち兵を 以て之を詰り、數事を約す、是より日本支那共に 其兵を京城に置く、此時支那は大院君を捕へて 國に還れり、
○光海 在位一五	獨立黨	
○仁祖 在位二六	壬午の變	
○孝宗 在位一〇		
○顯宗 在位一六	日清の關係	日清の關係。光緒十年(明治十七年)獨立黨の 士金玉均、朴永孝等刺客を以て事大黨の大臣を

○肅宗明 在位四六	甲申の變	襲はしめ京城大に亂る、日本の兵入て王宮を護し遂に清兵と衝突す、日本公使竹添進一郎退き歸り、金朴等皆海外に逃る、日本依て朝鮮を責めて償金を命じ、又伊藤博文を清國に遣はして會盟せしめ、日清各兵を朝鮮より徹し、且擅に出兵せず、若し之を出すの必要あらば、必ず相通告すべきとを約す、之を天津條約といふ、清國又大院君を送還す、
○景宗昞 在位四年	天津條約	
○英宗昞 在位五二	内政の紊亂	内政の紊亂。朝鮮又凶歳を名として防穀令を布く、是れ通商條約に違ふ、日本之を詰り論判年を連ね、明治廿六年其局を結べり、此時慶尙全羅の諸道に東學黨なる者あり、西教を斥けて東學を興さんとするを主とし、閔家の苛政を怨む
○正宗麻 在位二四	防穀令	
○王愷 在位九年	東學黨	
○純祖瑛 在位一五		

○翼宗昊 在位五年	日清の交戰	者又相黨與し所在に蜂起す、韓廷制する能はず、日清の交戰。朝鮮は東學黨の内亂に依り援を清に乞ふ、清兵海路來て牙山に入る、日本又知照して兵を朝鮮に送る、會々日清の海軍豊島に會戦し、次で日本は牙山の清軍を斥け、兩國遂に各戦を宣す、明治廿七年八月朔日、日本は海陸皆勝ち、向ふ所前なく、八道の山河又清兵なし、閔族は逃走し、東學黨も鎮定す、日本益精兵を盡して清兵を征し、旅順、威海を陥れ、九連、牛莊を屠り、勢愈盛なり。
○憲宗奐 在位一五	豊島	
○哲宗昇 在位一二	旅順	
○今王熙	威海	
	諸政の更革	諸政の更革。日本又朝鮮に勸めて諸政の更革を促がし、議政府を改めて内閣組織となさしめ、百般の事其扶助による、日本明治廿八年五月
	内閣組織	

日清媾和 獨立祭日	院君閔妃	内亂外勢	大韓皇帝
<p>十日(朝鮮四月十四日)日清媾和成り、清國は朝鮮の獨立を承認す、依て清の正朔を廢して年號を建て、此日を以て獨立祭日とす、然れども内廷に於ては太院君閔妃其勢兩立せず、軍起りし時太院君再び事を執りしが尋て又罷め、閔氏又盛なり、此年十月京城亂兵又起り閔妃遂に害せられ其族衰ふ、今王又亂を避けて露國公使館に入る、此後大臣權を争ひて内閣數々變動し、遂に又議政府の舊に復す、朝令暮改の感なきにあらず、今や王は宮に還り、又皇帝と稱し國號を韓と更む、然れども半島の形勢常に外威の加はる者あるが如し。</p>			
<p>朝鮮歴史 終</p>			

朝鮮

第二七代

○今王

名

朝鮮歴史 終

印度歴史

總論

印度半島の興亡盛衰を叙するに先ち、又其地理、人種、政治等に就きて大畧を述べん。

地理
半島
高原
大河

地理。印度は亞州南岸の中央に突出せる一大半島にして、遠く印度洋に望み、ベンガル灣とアラビア灣との間にあり、其地勢北に喜馬拉耶山脈あり、南にデツカシ高原あり、而して「インダス」「ガンジス」の兩河其間に奔流し、港口頗る多く土地豊饒なり。

人種
亞細亞種
歐羅巴種

人種。支那及び朝鮮の國民は皆亞細亞人種にして、其中に數種の別あり、然るに印度は亞細亞人種のみならず、歐羅巴人種却て大に勢力を占め、印度歴史の全局を掩

政治	歐洲民族	回々人種	蒙古人種	アリアン人	ヅラビタ人
列國	波斯	希臘	西利亞	(諸朝)	同教

ふ者は此「アリアン」人種なり先是「埃斯德羅利」人種夙に印度に住して「ヅラビタ」人と稱し其後「アリアン」人に逐はれたり故に古來印度の中原に驅逐したる者は「ヅラビタ」人「アリアン」人「蒙古人種」回々人種にして近世に至りて歐洲の國民又之に加はれり。

政治 印度は邦國の興廢頗る甚しく、上世に於ては「アリアン」人來りて土着の「ヅラビタ」人を驅逐せし以來、數多の小國に分裂して久しく統一する所なし、後外人の侵入を受け、波斯(「ダリアス」)の治下となり、希臘(「アレキサンダー」)の來侵を受け、「シリア」(「セレウコス」)の屬領となりしも、次で獨立す。中世に於ては諸朝の興廢數ふるに違あらず、其間常に回々教徒の侵畧を受けたり、然るに西曆千五百年代に至り、蒙古種帖木兒の後裔「婆爾」印度を征服して「莫臥

莫臥兒國	歐洲各國	英領印度	年代	支那	埃及	印度
○上世	印度の古史	土着の民族	外人の侵入			

兒、帝國を建つ、此際葡萄牙、和蘭、佛蘭西、英吉利又來航して交々權勢を恣にし、莫臥兒帝國此に亡びて印度は遂に英國の領土となりたり。

年代 印度開國の年代は今より五千年以前にありと傳ふ、而して印度の支那に知られたるは前漢武帝の時、張騫西域に使して其名を聞知せしに始まり、當時は之を身毒といふ、佛教の東漸と共に國聲四方に傳播せり、支那、埃及と共に世界舊國の一なり。

第一 上世史

印度の古史 古代印度の開化は「ガンダス」「インダス」兩河の江邊より起れり、其初め度羅毘陀人種「埃斯德羅利」種此地に土着せしも、今を去ると凡そ四千年以前に當り、亞利亞人種「歐羅巴」種の一派中央亞細亞より印度河を越へ

邦國の建設

て恒河や邊に至り、土人を壓倒し、或は逐ひ、或は從へ、國を今の「ベンジャツプ」北印度に建て、梵拉摩波留多と稱す、後又幾多の部落に分る、是れ印度に於ける文化の淵源にして歴史の依て起る所なり。

社會の階級

社會の階級。古代印度の形勢を考ふるに印度人は概ね哲理に精しきも歴史の念に乏しく、當時の史料として今日に現存せる韋陀の教文と摩奴の法典とによりて察するに社會に階級の制ありて四族の別甚だ嚴なり。第一は波羅門といひ、僧族にして祭祀教學を司り最尊崇せらる。第二刹諦利(刹利)といひ、王族にして政治を施き兵權を掌り國土人民を支配す、此族は後波羅門の爲に壓倒せられたり。第三は毘舍にして商賈の族なり。第四は首陀羅にして農工牧畜を業とし、最下等の民なり、蓋し是れ「アリヤ

韋陀の教文

摩奴の法典

波羅門

刹諦利

毘舍

首陀羅

ン人來て、ヅラビタ人を從へ、勝者と敗者との關係より起りしものならん。

開闢の傳説

大梵天王

日種月種

麻伽陀國

僧俗の軋轢

開闢の傳説。古史の徵すべきものは前説の如しと雖も、古傳によれば、太古に大梵天王あり、人類悉く此王より出で、四族の別を生じたり、後刹諦利種に日種月種の兩王族ありて中印度に起り、互に勢を争ひて兵を交ふ、此時麻伽陀國は日種に屬し、月種爲に敗滅に歸したりといふ、是れ實に古來の大變にして、紀綱紊れ、風俗破れ、摩奴の法典も空文となり、韋陀の教文を疑ふ者あるに至り、國力此より衰へたり。

貴族の軋轢。波羅門教の積弊。此頃に當り、刹諦利族(王族)と波羅門族(僧族)との軋轢愈々甚しく、波羅門教は其積弊の極に達したり、蓋し波羅門は深く哲學に耽り、善

波教の積弊

(各派)

勝論

數論

行を尙ひ、敝衣短褐にして樹下石上に起臥し、肉欲を滅殺すれば解脱して天國に生じ得べしとなす者にして、其教儀漸く變遷し、地水火風空の五大を以て本源となし、地論師、水論師、火論師、風論師、空論師等次第に起り、勝論派あり、數論派あり、此等の諸派皆私見を張り我意を擅にし其弊止る所なし、是に於てか釋迦出でたり。

佛教の創始

釋迦の略傳

佛教の創始。釋迦牟尼の略傳。釋迦は刹利族(王族)にして中印度迦毘羅城主の太子なり、名を悉達瞿曇といふ、(支那周靈王十四年^{○皇紀一〇三〇年}に生れ、周敬王四十一年^{皇紀一八二一年}に没し、壽凡う八十なり)太子夙に世人皆生老病死の苦を免かるゝ能はざるを悲しみ、年十九竊に王城を出で、出家し、始めは波羅門に師事して苦行六年の久しきに及び、未だ解脱を得ざるを以て、翻て麻伽陀國に行き、菩提樹下に

波斯の侵入

ダリアス王

ダークセス

希臘の遠略

思惟すると四十九日、始めて大悟徹底する處あり、遂に波羅門以外に一新宗教を開きたり、時に年三十、其後四十餘年の間因縁果報の眞理を説き、安心立命の妙諦を傳へ、弟子雲集して外道屈服せり、然れども佛教が勃興して印度以外に傳播するに至りしは、實に佛滅後百餘年の事なり。
波斯の侵入。印度は小國四方に割據して相抗爭するの時に當り、外患忽ち起れり、此頃波斯の國力大に振ひ、巴比倫、猶太、非尼士亞等を一統して東洋に雄飛し、支那周敬王^{皇紀百}の時(西紀前五百十八年)印度に侵入して、インダス河畔の地を取り、其貢賦は波斯歳入の三分一なりといふ、晩年波斯は希臘と戦ひ、ダリアスの子、ダークセスは大敗して歸れり、是れ東西兩洋衝突の始なるべし。
希臘の遠略。其後百八十餘年を経て、希臘の亞歷山大

亞歷山大王

(保路斯王)

王四方を征服して波斯を滅し、尋で印度に寇し、印度河を渡り恒河に至る。印度の諸王多く降る。保路斯王能く防ぎしも遂に利あらず。パンヂャプ又陥り大王は益進んで麻伽陀國を攻めんとす。然るに將士皆歸るを思ひ敢て進まず。王遂に師を班へせり。(西紀前三百二十七年東周顯王四十二年西紀三百年代)

西利亞の屬領

セレウコス

(サンドラグ
フタ)

アンチオコ

西利亞王國の屬領。歷山大王の没後其將セレウコスは東方一帶の地を領して西利亞王國を建てたり。然るに先きに希臘軍の退き歸るや麻伽陀國の首陀族「サンドラグ」フタ其國を統一す。セレウコス兵を率ゐて來攻せしが次で和を講ず。當時西利亞王國の勢甚盛なりしも、セレウコス死じ其子アンテイヲコス二世の時に及び、安息パルチヤ大夏バクトリア皆叛じ西利亞も亦羅馬の爲に滅さ

る而して印度の形勢又一變せり。故に之より後を中世となす。

○中世

第二 中世史

諸朝の興廢

○モリアン朝

サンドラグ

フタ

ミトラグ

アンリーカ

毛利亞朝の隆興。印度は小國互に割據すと雖も、中天竺の麻伽陀國最も強大にして那伽朝の王世々君臨せり。然るに首陀族の闍度羅瞿布多英明の資を以て起て之に代り、之を毛利亞朝といふ。其後ミトラグタ立ち、次で亞輸迦王アシュカ又亞育王立つ。國勢益盛なり。此朝の始祖もと卑族首陀なりしを以て、波羅門の族貴族を惡み佛教の公布を以て其政略となし、佛教は此時よりして四方に弘通するに至れり。(尙後節に於て詳説すべし)

○ナンガ朝

○アンドラ朝

諸朝の興廢。毛利亞朝亡びて珊瑚朝コラ之に代り、珊瑚朝亡びてアンドラ朝興る。此時波羅門復興して佛教排斥せ

○バラ朝

○ゴナル朝

佛教の東漸

南方佛教

北方佛教

支那

後漢

られ其徒多く四方に逃る、アンドラ朝亡びて「バラ」「ゴナル」の兩朝對立す、支那後唐の時に至りて回々教徒の侵入を受け、之より後其侵略殆止むとなし。

佛教の東漸。佛教は毛利亞朝亞育王の時大に隆興し、使僧出て、四方に布教せり、後波羅門に驅逐せられて却て中央印度以外に及ぼし、南北の二派に分かる、其南して錫蘭に入り、緬甸に傳へ、暹羅に及ぼせし者は南方佛教となり、其北して中央亞細亞に入り、遂に支那に至りし者は北方佛教となる、而して南方は小乗にして北方は大乗なり、蓋し支那にては秦皇漢武の時既に異俗の人來り佛像の傳りしとありといふも、帝室の之に歸依せしは後漢明帝の永平七年蔡愔、王導等教を奉じて西域に使し、佛像經論を求め、僧侶を伴ひて歸り、洛陽に白馬寺を建てしを以

(名僧)

百濟

高麗

日本

回教の侵入

て始となす、其後印度にては馬鳴、龍樹等の名僧出て、大乘教を説き、僧侶又多く支那に入りて梵經を翻譯し、魏晉に至りて益々盛なり。

東晉の時始めて僧侶を百濟に遣はし、秦主苻堅又佛教を高麗に傳へ、高麗は之を新羅に傳へ、百濟は之を日本に傳へ、海東諸國皆佛教に歸依するに至れり。

回教の侵入。印度は從來常に外寇の患あり、回々教亞刺比亞に起りて四方を征略し、西紀七百年代印度の北西に到りしも、久しからずして退き、回々教國分れて東西兩朝となる、バグダッド朝の衰ふるや、其臣起て國を「ガズニ」(阿富汗斯坦)に建つ、後西紀十一世紀の時「ガズニ」の「サルタ」ン「マンムート」(土耳其人)大に遠略を事とし、印度に來寇せしと前後十七回、諸國抗する能はず、「ベンヂヤツ」は遂に

バクダッド朝
ガズニ國
マンムート

諸朝の興敗

回々教徒の手に落ち、佛教殆衰へたり。

○ゴル朝

○奴隷朝

○ギルチ朝

○トグリ朝

諸朝の興敗。回教の侵略によりて佛教全く衰へ、以後の諸朝は多く回々教國なり、此頃瀾兒國起りて、ガズニ國を滅せしも、成吉思汗に逐はれて印度に來り、瀾兒朝を建つ、其版圖「インダス」より「ブラマプトラ」に至る、三世にして亡び、其後五六世の間、奴隷相次ぎて位に即き「デルヒ」に居る、之を奴隷王朝といふ、西紀千二百九十年、次を「ギルチ朝」代り立ち、「トグリ」朝又之に代はる、時に帖木兒の來寇あり。

帖木兒の遠略

察合台
伊蘭汗

帖木兒の遠略。蒙古人種の傑人は獨り成吉思汗、鐵木眞のみにあらず、西紀千三百年代、帖木兒あり、「サマルカンド」より起りて四方を征略し、察合台國を犯して、「トランス」ヲキシアナより、「カシユカール」を定め、伊蘭汗國を滅して

欽察

露國

印度

波斯、イスバハンに至り、欽察國を征して遠く露國に入り、「モスクワ」を陥れ、西は「ワットマントルユ」を討ち、又南して印度に向へり、時に印度は「トグリユツク」朝にして國勢振はず、帖木兒は印度河を渡り、「デルヒ」を陥れ、恒河に至りて師を班せり、後又明を侵さんとし、遂に没す、西紀一四〇五半、其雄圖遠略實に四海を振盪せり、而して其子孫又遺業を繼ぎ、遂に印度を服して莫臥兒帝國を建設せるに至り、東洋に於ける蒙古人種の功業頗偉なりといふべし。

○近世

近世の概勢

第三 近世史

近世の概勢。印度は内に於ては諸朝興廢するの間、外よりしては歐洲諸國の來航あり、内勢一たび振ひて莫臥兒帝國となり、外威更に加はりて遂に英領印度となるに至れり、故に莫臥兒帝國の興起并に歐洲諸國の來航を以

て中世と分つ。

○ロデ朝

○莫臥兒帝國
一世パルヘル
二世ヒマユン

三世アクバル

莫臥兒帝國の勃興。印度はトグリユック朝亡びて帖木兒の將、サイットキザール來り、ブンジャツブを治め子孫相次ぐ、後阿富汗のプーラル、ロデ之を滅じ、路提朝を立つ、路提朝の末葉に及び、帖木兒五世の孫婆伯爾は、ヒンドクツシユを越へ「カプール」に入り、印度河を渡り、遂に「デルヒ」を陥れ、「ロデ」朝を滅じ、國を建て、「デルヒ」に都し、回々教を奉ず、之を莫臥兒帝國といふ。

二世の内亂。二世弗馬暗の時、阿富汗人兵を起して、ベンガル地方に據る、帝討て大敗す、阿富汗帝と稱す、二世波斯に走り、其援を得て位に復す、國力大に衰ふ。

三世の英明。太子亞克婆爾嗣ぎ、英明大略あり、阿富汗を驅逐して南印度を一統し、又心を内治に留め、印度人を

中宗アーラン
グセフ

外寇
内憂

葡萄牙

して回教徒と同權ならしめ、官吏に登庸し、信仰の自由を許し、封建の制、田租の法を定む、土人大に悦服して「アクバル」大帝といふ。

帝國の末路。亞克婆爾より二傳して、澳蘭具塞布に至る、帝又武勇にして四方を經略し、北印度全く其有に歸す、然れども回教を重じ、寺院を焚しを以て、晩年怨民蜂起す、且遺子位を争ひ、國益亂る、「マラツカ」人屢入寇し、波斯王又來て「デルヒ」を陥る、此後「マラツカ」人「アフガン」人の侵略を受け、諸侯漸く大にして、帝は虚器を擁するのみ、遂に英人の乘ずる所となり、「モハメッド」バハツールに至て亡ぶ、后十七代なり、今西紀千五百年以後にかゝる歐洲交通の形勢をいはん。

葡人の渡來。先是印度は、久しく歐洲との交通なかり

新航路

しが、西暦十五世紀の頃、歐洲人は別に印度に達するの航路を發見し、東洋との貿易を開かんと企てたり、西暦千四百九十八年、葡萄牙王「イマヌエル」は始めて「ゼノア」人「バスコドガマ」をして喜望峰を回航して印度に到らしめ、「カルコドガマ」をして上陸したり、是れ「ロデ」朝の「アフガン」の時なり、是より葡人多く來り、遂に東印度を占領して、葡領印度の太守を置くに至り、互市を開き、領域を擴め、「ゴニア」を以て首府となし、「マラッカ」「錫蘭」等及び、東洋貿易を獨占したり。

和蘭

蘭人の渡來。然るに十六世紀の末葉に及びて、和蘭人又多く東印度に來りて、交易に従事し、印度政府の許可を得て、東印度商社を立て、「バタビア」を首府として、四方に通じ、十七世紀の頃には、葡萄牙の勢力全く衰へ、和蘭愈々盛

なり。

英吉利

英人の基業。英吉利人又印度貿易の利を思ひ、西暦千六百年の頃、「エリサベス」は又印度に東印度商社を起し、印度は葡和英三國の争地となれり、而して葡人先づ衰へ、和人は英人と戦て大敗す、英人之より、「マドラス」「ボンベイ」を得、「カルカッタ」に及び、遂に又佛國と争ふに至れり。

佛蘭西

佛蘭西人も亦西暦千六百七十四年に東印度商社を立て、「ボンデチエリ」を占む、「デュウブレ」其總督となるに及びて、大に四方を蠶食し、勢威大に振へり、此時英人「クライブ」は商會の書記より起りて、干戈を動かし、遂に「ボンデチエリ」を陥れ、千七百五十一年に至りては、佛領殆英人に歸せり。

州牧の衰亡

州牧の衰亡。此時モガル帝國の威漸く衰へて、ナボツ

新航路

バスコドガマ

しが西曆十五世紀の頃歐洲人は別に印度に達するの航路を發見し、東洋との貿易を開かんと企てたり、西曆千四百九十八年葡萄牙王「イマヌエル」は始めて「ゼノア」人「バヌコド、ガマ」をして喜望峰を回航して印度に到らしめ、「カルカッタ」に上陸したり、是れ「ロデ」朝の「アフガン」の時なり、是より葡人多く來り、遂に東印度を占領して葡領印度の太守を置くに至り、互市を開き領域を擴め、「ゴア」を以て首府となし、「マラツカ」「錫蘭」等に及ぼし、東洋貿易を獨占したり。

和蘭

(バタビア)

蘭人の渡來。然るに十六世紀の末葉に及びて和蘭人又多く東印度に來りて交易に従事し、印度政府の許可を得て東印度商社を立て、「バタビア」を首府として四方に通じ、十七世紀の頃には葡萄牙の勢力全く衰へ和蘭愈々盛

英吉利

(マドラス)

英人の基業。英吉利人又印度貿易の利を思ひ、西曆千六百年の頃「エリサベス」は又印度に東印度商社を起し、印度は葡和英三國の争地となれり、而して葡人先づ衰へ、和人は英人と戦て大敗す、英人之より「マドラス」「ボンベイ」を得、「カルカッタ」に及ぼし、遂に又佛國と争ふに至れり。

佛蘭西

(ボンヂチエリ) デユウブレ クライプ

英佛の衝突。佛蘭西人も亦西曆千六百七十四年に東印度商社を立て、「ボンヂチエリ」を占む、「デユウブレ」其總督となるに及びて大に四方を蠶食し、勢威大に振へり、此時英人「クライプ」は商會の書記より起りて干戈を動かし、遂に「ボンヂチエリ」を陥れ、千七百五十一年に至りては佛領殆英人に歸せり。

州牧の衰亡

州牧の衰亡。此時モガル帝國の威漸く衰へて、ナボツ

プラッセルの戦

「洲牧」の權愈強く、「ベンガル」の洲牧「スラヂャー」、ドローラは英人の專權を憤りて英の堡塞を陥る、「クライブ」兵を以て之を「プラッセル」に破り遂に捕へて之を殺し又「デルヒ」朝廷に迫る、帝宮を逃れ兵を擧げて英人を撃しも亦大敗し、印度の要地は多く英人に歸したり。

英國の蠶食

英領印度の興起。西曆千七百六十七年「クライブ」召還

クライブ

せられ、次で「ヘスチングス」來て「ベンガル」太守となり、遂に

ヘスチング

之を懐けたり、其後英領印度大總督を置きて益領土を擴

ベンガル大守

む、千八百五十七年土人獨立の兵を擧ぐる者ありしも事

印度大總督

成らず、翌年英國は東印度商社を廢し、英國女皇印度皇帝

土人の反亂

の位に即き、印度卿及び印度事務委員を本國に置き、印度

大總督は直に印度を經理するとなり、東洋に於ける英

英國の勢力

國の勢力愈加はり、遂には阿富汗を略し緬甸を領するに至れり。

印度歴史 終

後印度歴史

安南、緬甸、暹羅

總論

總論
地勢
三國
現況

亞州の東南に一大半島あり、之を縦斷して三國となす、安南は東部、緬甸は西部にして、暹羅は即ち中央にあり、眉公河は安南と暹羅とを境し、滄瀾江は暹羅と緬甸とを界す、之を印度に對して後印度諸國といふ。此等諸國の形勢を考ふるに、今や安南は佛國の保護を受け、緬甸は英國の領土となり、暹羅又僅に獨立を保つのみ、古來の變遷は小國數々分合して革命頻に起り興亡一にあらず、故に其大略を述べん。

第一 安南

●安南
三國の形勢

安南の三國。安南は往古三部に分る、北邊の支那に接

南越(交趾)

扶南(真臘)

林邑(占城)

南越交趾

開國の傳説

周代

秦皇の二郡

高帝の封冊

(五世九七年)

漢武の九郡

交趾の治亂

する地方を南越といひ又交趾といふ、南隅の地瀾滄江の一帶を扶南といひ又真臘といふ、中央を林邑といひ又占城といふ、三國各獨立し時ありて分合せり。
南越交趾の變遷。安南の古傳によれば、神農の裔此地に來り、貉龍君に至て百男あり、是れ百粵の祖なりといふ、百粵は即ち百越にして南嶺の南を南越といひ北を東越といふ、越裳氏の周に朝せりといふも此一部なり、秦始皇に至り南越の地を平げ南嶺の外に南海、桂林、象郡の三郡を置きたり、秦の末葉南海郡尉趙陀自立して王と稱す、漢の高帝更に封じて南越王となす、其後武帝路博德等をして之を平げしめ南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、九真、日南、珠崖、儋耳の九郡となす、後漢光武の時交趾反す、馬援之を平ぐ、三國に至り吳は九真、日南の叛を平げ六朝を経て隨唐に傳

安南の都護

安南の獨立

○吳四世二九

○丁二世二三

○黎三世二九

林邑占城

區連

暹都

扶南真臘

范曼

ふ。唐太宗は領土を分ちて十道となし交州は嶺南道に屬せり。高宗特に安南都護使を置く。安南の稱實に此に始まる。然るに五代の亂に乗じ吳權自立して交趾王と稱す。是より永く外國となれり。後丁部領之に代り宋太祖より交趾郡王の封爵を受く。次で黎桓又其後を篡ひ吳丁黎の三氏相繼承せり。

林邑占城の盛衰。西漢の末葉區連は日南郡象林縣に自立し林邑王と稱す。其後篡奪攻伐あり。南朝宋に朝して林邑王の封爵を受く。又隋の爲に侵されしも之を復し四方を征す。唐の安南都護の爲に破らるゝに及び、都を占婆に遷して占城國といふ。

扶南真臘の興亡。扶南は南隅の蠻族なり。范曼に至りて扶南大王と稱す。南朝に貢事し曾て梁の封爵を受け扶

興廢

三國の形勢

○大越

李九世二六〇

占臘

○ガ南

陳十二世一九〇

元朝の來寇

○大虞

南王と稱す。後伊金那之を滅して真臘と號す。

三國の形勢。交趾の李公蘆は黎氏に代て自立し交都(今の東京)に都す。其後國を大越と改め諸制を整へ佛法を尙ふ。此時宋と争ひ又占城と闘ひ勝敗あり。後宋は大越を封じて安南國王となす。

此際占城、真臘互に相攻伐し、真臘遂に占城を滅して占臘と稱す。其後安南は李氏の政衰へ陳氏代り立ち紀綱大に張る。元朝興るに及び其封爵を受く。占臘又占城、真臘の兩國となり共に元の封爵を受く。然れども叛服意に任ず。元世祖將を遣はして數々來寇し遂に安南行省を置きて之を統べたり。安南は後占城の爲めに苦められ又遂に權臣の篡ふ所となれり。

明の時安南王陳氏の臣黎季犛其主を弑して自立し國を

胡二世八年
明朝の府州

六朝の興亡

大越の再造

大越

黎氏前朝

十一世

百十年

莫氏五世

大虞と號す、陳氏の族之を明に訴ふ成祖即ち將を遣はして征討せしめ、其地を十七府に分ち交趾布政司を置きたり、交趾獨立以來吳、丁、黎、李、陳、胡の六朝四百余年を経て又支那の郡縣となる然れども久からずして安南再造せり、**大越の再造**。明朝は安南を討ちて胡氏を滅し、黎利を以て知府となす、黎利恢復を計り陳氏を奉じて安南國王となす、次で自立して東京に都し大越皇帝と稱す、明宣帝許して外藩となす、是より大越愈々強大となり聖宗の時には占城を略して殆之を亡ぼし、又老撾を討ち緬甸を服し、疆土大に加はる、且又法令を制し民政を務め、聖宗は實に安南に於ける古今の名主なり、然れども其後内訌起り廢立行はれ國終に衰ふ。
明世宗の時莫登庸篡立して黎氏を追ふ、然れども次で黎

六十六年

國內の二分

廣南の興起

席南王阮氏

交趾王阮氏

東京王文氏

黎氏後朝

八世

二四二年

安南の一統

越南王國

氏の臣王子を奉じて恢復を計る、莫氏即ち明に内附して安南都統使となる、是より莫氏は北に據り黎氏は南を領し國內二分せり、後黎氏は莫氏を滅して東都に入り國內一統す、然れども政權常に下にありて鄭氏事を專にす、**廣南の興起**。然るに明の末葉廣南に阮氏起り順化に都して廣南王と稱す、國內又二分す、廣南頻に占城東蒲塞を征す、此時日本の商船來航せり、大越廣南兩立すると百五十余年共に清朝の正朔を奉ず、其後西山の阮文岳起て廣南を滅し國を上下中に分ち交趾王と稱す、交趾の將文惠又大越を侵し遂に位を篡て東京王と號す、清聖祖許して外藩となす。
安南の近勢。先是廣南阮氏の族福映は暹羅に逃れ、次で佛蘭西の救を得て下交趾を定め、柴棍に都し遂に上交

王朝阮氏
一世一元

佛國の關係

(一) 嘉隆帝

(二) 明命帝

(三) 紹治帝

(四) 嗣德帝

(五) 得德帝

(六) 協和帝

(七) 建福帝

(八) 成泰帝

趾に進み、東京を陥れて國を越南と號し、清に内附す。往古交趾、占城、眞臘に分れし者皆相合し、安南始めて統一す。年號は一世一元なり。故に年號を以て帝代とす。

佛國との關係 初め阮氏の援を佛國に求むるや土地割讓を約す。事成りて後其言に違ひ且つ佛國宣教師を虐待す。歷朝諸帝又外人を悦ぼず。

紹治帝の時始めて兵を佛國と交へ佛將次て柴棍を取る。此時又暹羅と事あり而して下交趾殆佛に歸す。

嗣德帝の晩年長髮賊の殘將劉永福を擧用し克く佛軍を防さし。佛將クルベール來り侵し安南大敗す。朝廷大に驚き國を擧げて佛國の保護に委ねたり。西紀一八八三年、明治十五年此間帝王屢々更立し。次で今帝立ち成泰と改元せり。

清佛の交戦

佛國の保護

○緬甸

緬甸の變遷

揮國

驃國

緬國

版圖

英領

元明との關係

清佛の交戦 然るに清國は佛國の措置を不當とし佛國に對して談判を開きしも和約漸く成る。然るに諒山の清兵會佛軍を砲撃して戰端忽ち起る。次で又和を講じ清は全く屬藩を解き安南は終に佛國の保護國となれり。西紀一八八五年明治十八年なり。

第二一 緬甸

緬甸の變遷 緬甸の古傳詳ならず漢には揮國と稱し唐には驃國と號し宋に至りて始めて緬國といふ。而して其部落は甸と稱し大甸小甸あり故に緬甸と號すといふ。往古驃國の版圖は東眞臘に接し西東天竺に連り南は海に屬し北は南詔長さ三千里廣五千里屬國十八ありと傳へし者今は悉く英領に歸せり。

元明との關係 元世祖は使を派して緬王を招致せし

緬甸王
宣慰司

も王従はず世祖依て數々之を征し遂に國都を陷る王出降る元即ち封じて緬甸王となす後國內亂れしを以て元は之を定めて宣慰司を置き明も亦之に倣ひ王を以て其長となせり。

三國の盛衰

阿瓦

阿臘干

毘牛

三國の盛衰。其後緬王は怒江上流の諸族と戦ひ又四方を征し遂に明の邊を侵すに至りしも尋て國內分裂して阿瓦(中部)阿臘干(西部)毘牛(南部)の三國となれり而して清の初世三國互に相攻伐し阿氏は毘牛を助けて暹羅を卻けしも後又毘牛を侵す毘牛人は和蘭の兵助を得て阿氏を併す其後又阿氏大に興り毘牛を滅し暹羅を亡し阿羅干を併せて一統の業をなせり。

阿瓦の興亡
英國の來寇

英國との干係。然るに西紀千八百年代に至り英國は既に印度を領し又緬甸に於て阿臘干附近の一島に就き

第一敗

第二敗

第三敗

英領の所屬

暹羅

建國の概略

て所屬を争ひ戦端此に始まる英兵怒江を溯り所在皆陷る國王「メンマン」は償金百萬磅及阿臘干メルグイ、ダホイの地を與へて和を講ず。此後國都阿瓦を曼陀黎に遷す次で又戦を醸し再び毘牛、マルタパンの地を割き海岸一帶の地は悉く英國の有に歸したり是れ西紀千八百五十二年なり。新王「チーポ」暴戾にして復英人と戦を開き英軍は國都馬德拉を陥れて王を擒にし遂に緬甸を以て悉く英領となし英領印度の所屬となす(西紀一八八五年)明治十八年にして此年佛國は安南保護を確定したり安南や緬甸や其近勢此の如し暹羅の形勢うれ如何ぞや。

第三 暹羅

建國の紀元。暹羅は往古老樸(北部)暹中部)及び羅斛(南

老羅

暹

羅

暹羅の勃興

部の三國に分れたりしが近來一統せり、隨の時始めて支那と通ず、當時羅斛は瞿曇氏王たりしが唐の始め李羅際亞王代り立ち、國を羅越と號す、是れ此國の祖先にして其即位の年を以て紀元々年となす、唐太宗貞觀十四年、日本舒明天皇十二年なり。

暹羅の盛衰

(元)

(明)

暹羅の盛衰。老羅及び暹の兩國は隨唐の前後に興りし者なるべし、其盛衰を詳にせず、元の末葉羅斛には革命ありて新王立ち暹國を併せて國を暹羅と號す、後使を明太祖に通じ暹羅國王の封爵を受けたり、王政衰ふるに及び李羅孫曇僧族より出で、位に、即く是れ第二期の始めなり、明萬曆年間日本慶長年間なり。

日本の交通

日本の交通。明の末葉日本戰國の後に當りて日本の商船は安南占城甘蒲塞等二十余國に往來し暹羅も亦相

山田長政

交通せり、日本山田長政來航し王の爲に阿瓦等の來攻を防ぎて功あり、遂に右相となる、左相之を嫉み新王立つに及び廢立を行ひ長政を害したり。

暹羅の中敗

暹羅の敗滅。此後日本は外交を禁じ支那又明清の革命あり、而して暹羅も篡奪相次ぎたり、次で後印度諸國互に相争ひ毘牛を攻め安南と戦ひ又清朝と事を交へ勝敗あり、遂に阿瓦の爲に滅さる。

暹羅の近勢

鄭氏の王朝

暹羅の近勢。暹羅は清の初世阿瓦の爲に全滅せられしも鄭昭起りて國を復し般谷に都す、次で又清の封册を受けて暹羅國王となる、其後安南と東蒲塞と争ひて其土を得勢益振ふ。

開國の方針

暹羅王は印度緬甸の興廢を鑑みて世界の大勢に従ひ、西曆千八百五十三年以後は開國の方針を取り、清國は元よ

今王の治世

り英吉利佛蘭西亞米利加とも通商を開き今や鳩拉命哥
羅焉王位に在りて益々治を圖り明治二十七年には日本
とも通商條約を結べり後印度三國に於て獨立を保持す
る者獨り此國あるのみ

中等東洋歴史 終

明治三十一年三月二十八日印刷
明治三十一年三月三十一日發行

定價金五十錢

(中等東洋歷史叢書付)

東京淺草區元鳥越町十七番地

高 山 榮 一

全 神田區裏神保町一番地

合資 敬 業 社

代 表 者 柴 田 勝 文

全 神田區錦町三丁目廿五番地

印 刷 者 熊 田 宜 遜

版權
所有

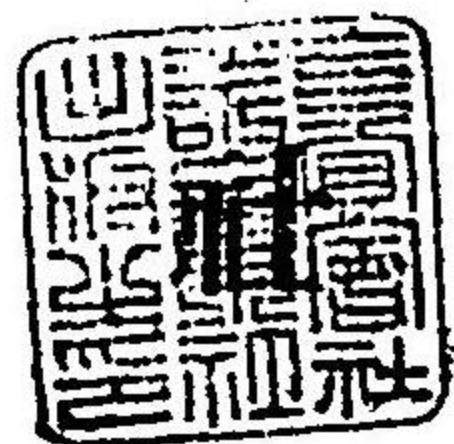
發兌書肆

東京市神田區裏神保町一番地

合資 會社

敬

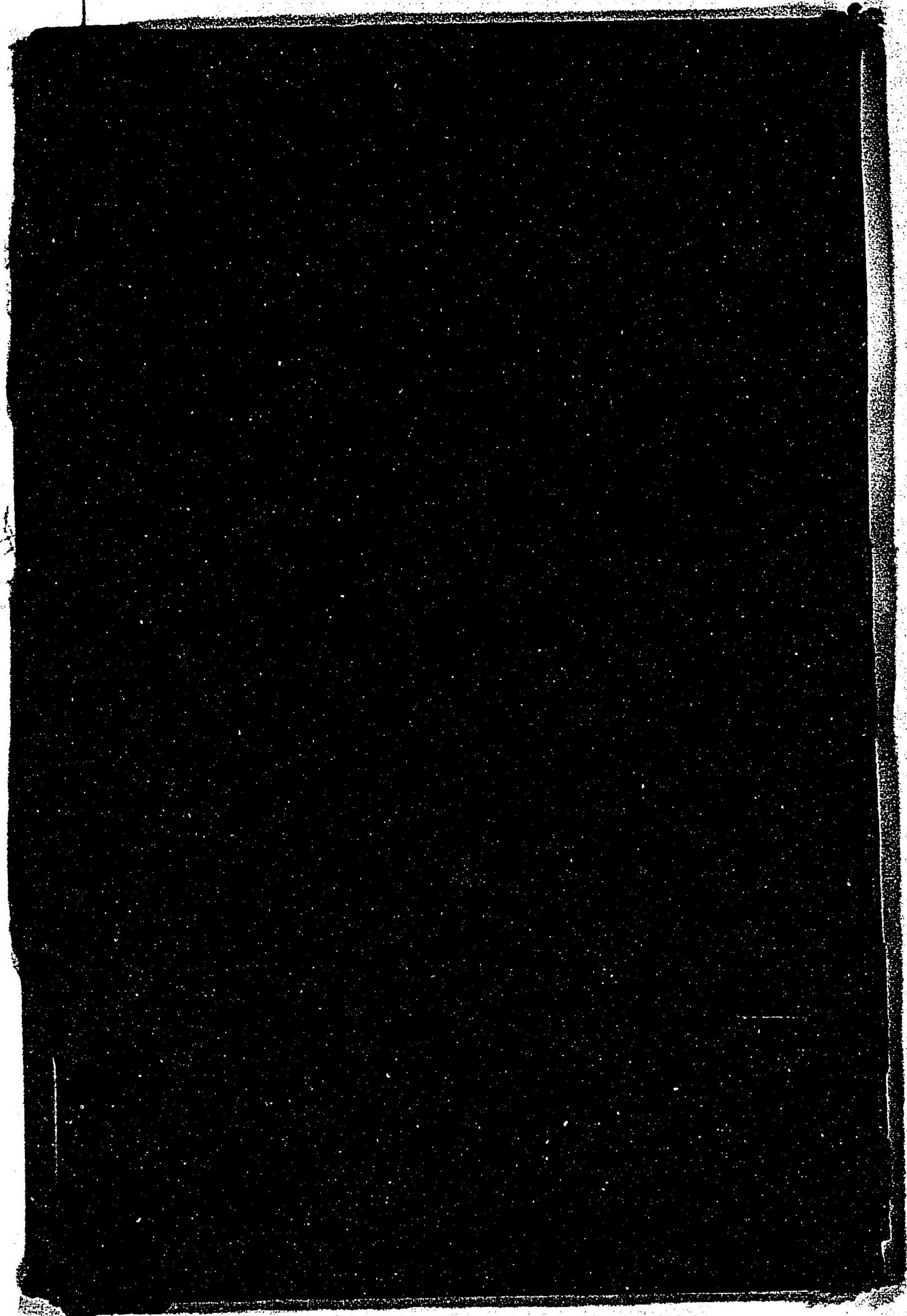
業



各 地 賣 捌 書 肆

東京市日本橋區通三丁目	丸善 商社	高知市龜町	宮脇仲次郎	甲府市	徵古堂
全 通一丁目	大倉 書店	松江市湊町	土肥 與平全	信州松本	柳正堂
全 本石町	小林喜右衛門	松江市白濁本町	園山喜右衛門	長野大門町	水琴堂
全 神田表神保町	中西屋書店	神戶市元町五丁目	吉岡 支店全	上田	高美書店
全 通三丁目	青野友三郎	姫路市面二階町	木村 治作全	長野大門町	西澤喜太郎
全 仲猿樂町	岡崎屋支店	岡山市西大寺町	武内彌三郎	上田	同 支店
大阪市備後町四丁目	梅原 龜七	美作津山	仁科 久造	越中富山市	大橋 甚吾
全 全	石井鈎三郎	廣島市鹽屋町	積善館支店	全 四十物町	中田 書店
全 全	吉岡 平助	山口縣山口町	桂山 陽堂	越後水原	西村 六平
全 全	松村九兵衛	丹波柏原	中井 正吉	新潟市學校町	櫻井 產作
全 全	南區心齋橋	但馬國豐岡	石田 松造	米澤市立町	素月 晨平
全 全	北久太郎町	福岡市博多中島町	森岡 書店	千葉縣千葉本町	多田屋支店
全 全	北久寶寺町	全	積善館支店	全 東金町	全 本店
全 全	京都市寺町通	全	菊竹 書店	橫濱市辨天通	九屋 書店
全 全	二條寺町	全	安中半三郎	仙臺市大町	藤崎 書店
名古屋市本町三丁目	松田 庄助	筑後久留米市米屋町	安中朋太郎	全	高藤 書店
全 全	川瀬 代助	長崎市酒屋町	鶴野 次郎	磐城小野	藤田善八郎
全 全	片野東四郎	全 引地町	長崎 次郎	山形市七日市	五十嵐 太右衛門
全 全	三輪文次郎	全 全町	吉田幸兵衛	全	牧野德太郎
伊勢津市大門町	河島九右衛門	熊本市新町	松井 義雄	北海道札幌南一條	小鹽 武吉
奈良縣奈良町	辻本 書店	鹿兒島市仲町	甲斐 治平全	全	荻間左右太
和歌山市本町	平井 文助	宮崎縣宮崎上町	河內 壯助	全	
全 全	宮井 支店	大分竹町			
全 全	新通二丁目	佐賀市			
高知市種崎町	澤本 駒吉				

79
29



79

29

(M)

003314-000-5

79-29

中等東洋歴史

高山 栄一/校

M31

ACC-1738



